

北海道の地神塔の儀軌補遺

梅 原 達 治

はじめに

地神さんの神体は五角の石柱に天照大神・倉稻魂神・埴安媛命・少彦名命・大己貴命の五神名を刻んだもので、形も大きさも県下ほとんど一定し、石は砂岩を使っている。（金沢1、二二七頁）

徳島県ではこのように地神塔はほぼ同一の形態をとっていると認識されており、そこには阿波藩の政治が大きな影響を与えたものと考えられている。私は前稿（梅原6）で、同藩は大江匡弼の『神仙靈章春秋社日醮儀』（以後、醮儀と略す。また同書の記述は滝本（四九五―五三六頁）により、引用の場合、その頁教のみを示す）にしたがって社壇を設けて土の神の祭祀をおこなうように布告を出したのではなからうかとの推察を示した。蜂須賀氏の版図であった現在の徳島県および兵庫県下の淡路島に普遍的にみられる五神号Ⅱ五角柱型の地神塔が示す均質性は醮儀の指示にしたがったものではないかと考えたからである。本稿では全国の地神塔の現状を醮儀と関連させて眺めてみることにした。なお前稿でも触れたが、醮儀の類書や醮儀に影響を与えた諸要因についても追究する必要があることはいうまでもない。

表 1 阿南市の地神さんの方向

方	向	基	%
北 北 北 北 北	北々々	75 (49.0)	
	東	10 (6.5)	
	東	5 (3.3)	
	西	8 (5.2)	
	西	3 (2.0)	
小 計 (ほぼ北向き)		101	(66.0)
南 南 南 南 南	南々々	12 (7.8)	
	東	1 (0.7)	
	東	7 (4.6)	
	西	4 (2.6)	
	西	5 (3.3)	
東	東西南	16 (10.5)	
	東	5 (3.3)	
	東	2 (1.3)	
小 計 (北以外)		52	(34.0)
合 計		153	

(阿南 2, 16 ページ)

一 方 位

加えて、「天照大神」と刻まれた面が北に向けられていて、土地不案内の者には方位を知るのに便利になっている。(藤丸、四三頁)

これも徳島県内に限なくある地神さんの状況の記載であり、その均一性を指摘したものである。この著者もその要因を寛政初年(一七九〇)ころからの藩の奨励にしている。醯儀はつぎのように社は北面すべきことを説いている。(五一五頁)

社といふは是土の神をいふ也、礼記の郊特牲の篇に云、社は土を祭りて陰氣を主とす、君北墻の下に南郷する事は陰に答るの義なり、日に甲を用る事は日の始を用るとなりと、註に地陰を秉則は社は乃陰氣の主なり、社の主をば壇上に設けて北面す、君北墻の下に来て南に向ふて是を祭るなり、

また、本朝社之略図として社壇の図を示し、正面に北、背面に南とそれぞれ文字を書いて、塔の方向を明示している。(五二二頁)

徳島県阿南市の塔の方位はつぎのとうりである。

(表一) ここには北向きが優勢がみられる地域(新野、宝田、長生など)とそれがみられない地域(福井、椿)のように地域差がある。北向きが優勢な地域は農耕中心の地域であるのにたいして、とくに海に臨む地域では海に面して立てられていることが指

北海道の地神塔の儀軌補遺

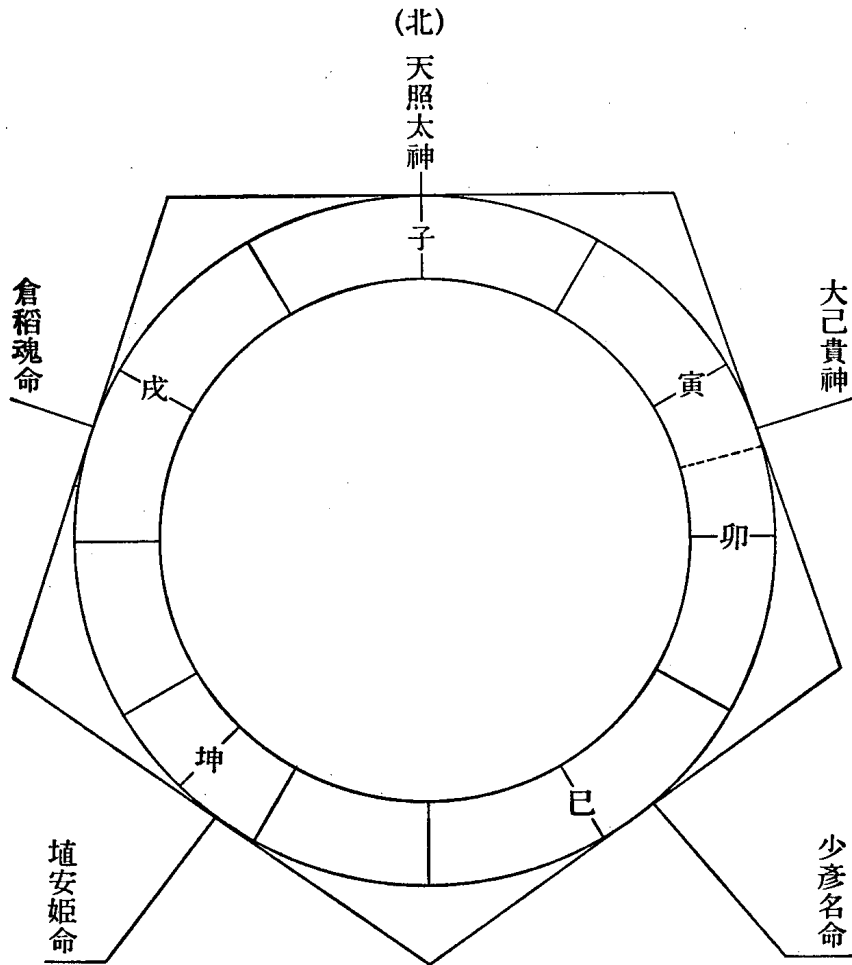


図 1 福山領答書の神号と方位（解説図）

摘され、地神さんが五穀の豊饒とともに航海の安全の願を托されているのであろうかと推測されている。（阿南2、一七頁）

淡路でも社日塔は北向きが多い。（濱岡、四二四頁）

徳島、淡路以外、広島県の備後地方で五角柱Ⅱ五神号型の地神塔が北向きに立てられていることを述べた記録として、「備後国福山領答書」^(二)（文政（一八一八—一八三〇）ころ）が指摘されており、（石田、五七頁）社日の行事についてつぎのように述べている。

近来備中に仕候故、接近の村には有之候。往來の路側に、五角なる木をたて、子の方に天照太神、寅卯に大己貴神、巳に少彦名命、未申に埴安姫命、戌に倉稻魂命、五神を書し竹をたて、注連を引、五穀をそなへ、社稷を祀り候事。秋社も同様にて、村中半日休息仕候。（平山、六八六頁）

この地方の地神塔の建立に国学者が関与したこと

が示唆されているが、(石田、五八頁) 地神塔の造立にさいして、それらの学者が醺儀を参考にしたと考えても不自然ではあるまい。

香川県の地神塔は東讃岐地方に多く西讃岐にはほとんどみられない。また、その五角柱Ⅱ五神号の型式も同じで、(武田 明、一一〇—一一一頁) 同形式のものが阿波の吉野川の北方地域^(三)から東讃岐地方にかけて多く分布している(市原、六二頁)と、徳島県との均質性が意識されている。これらのことから、香川県内の五角柱Ⅱ五神号型の石塔をともなう地神信仰は徳島県から伝播したものと考えられるが、とくに方位についての記述には接していない。

また、岡山県にも五角柱Ⅱ五神号型の地神塔が多いことは知られている。(島村、二〇四頁) さきの「福山領答書」が示すように、備後の地神信仰が備中より伝播したものであるならば、岡山県西部の塔も北面していたことが推測される。

梅 原 達 治
関東地方には五角柱Ⅱ五神号型の地神塔が散在している。このことについて「関東各地に普遍的にみられ地方的片寄りがすくない」との指摘がある。(大護、四九五—四九六頁) このように地域的偏倚が少いということは、それらの地

神塔が共通の基準にしたがって立てられ、近隣の塔の模倣によるところがすくないことを推測させ、各地域で直接醺儀を参考にしたと考えることと矛盾しない。これらの塔の多くの祭神は醺儀のものと変らないが、方位については、移転などとともに変化することも考えられ、神号ほど均等性は強くみられない。横浜市内の二基の五角柱Ⅱ五神号型の地神塔(伊東、三四頁、三五頁)のうち、旭区上川井町大貫谷水道路線の文政一三年塔(一八三〇)はほぼ南面しており、南々西に向いている戸塚区吉田町八幡社の文化一三年(一八一六)には、春秋社稷塚などと刻まれており、醺儀の教えをあらわしたものとみることできる。(岸上氏私信)(図版V-1)(横浜、一三八頁)

千葉^(三)県海上郡海上町の田の神のうち、三基は五角柱Ⅱ五神号型の石塔であり、(嶋田、七頁、服部、四七頁) そのう

ち、大間手、幾世の二基は北面している。(図版Ⅳ)

埼玉県児玉郡秋平村^(マコ)稲沢に天照太神、大己貴命、少彥名命、埴安媛命、倉稻魂命の五神号を刻んだ社日様と呼ばれる地神塔の記載がある。(武田久吉、二九九―三〇〇頁) この地域を含む現児玉町内には多くの社日様がみられるが、このことについては別稿にゆずりたい。同町に接する児玉郡美里町内には三基の同型の社日様がみられる。古郡(旧・那珂郡)の北向神社の境内にもあり、(大護、四九四頁) この北向という象徴的な社名により興味がもたれた。しかしこの社名は地神信仰とは直接の関係はないようである。^(四) 美里町内の社日様は、この古郡の北向神社境内のものと大字広木の鵜薙神社境内の二基は北向きであるが、沼上の北向神社境内のものは西向きである。ただし、沼上のものは、やく三〇年まえに境内で移転したという。(図版Ⅲ)

美里町内には、古郡、沼上のほかにも、小茂田、阿那志、北十条と計五社の北向神社があるが、三社には社日様はみられない。そして北向神社には、出水に悩まされていた赤城山麓の人びとが、美里の草原地帯に移住して安らかな生活を送るようになったが、故郷が忘れられず、その方向、つまり北に向けて神社を建てて祖先を祀り今日にいたったとの由緒が伝えられている。

なお社日様の祭祀は現在おこなわれておらず、そのことを知っているのは七十才以上の古老にかぎられている。(今井氏私信)

北向という地名は青森県や奈良県にあるが、地神信仰との関連はみられない。

北海道の地神塔について、とくに造塔の要件に北向きということが意識されているという報告には接してはいない。^(五) 神社境内などでは全体の配置によってその方位がきめられているとの印象が強い。しかし、現実には北面している地神塔は多い。(図版Ⅰ―3)^(六) 今後地神塔の調査にあたっては、その再建や移動にともなう方位の変化を確めて、その観念

の消長を追跡する必要がある。

注

(一) 幕府の発した「諸国風俗問状」に福山藩が答えたもの。図

一は答書の方位を現在の表現と比較したものである。

幕府の命によって「古今要覧稿」の編纂に着手した屋代弘賢等がこれまでほとんど記録されていなかった諸国の風俗習慣等をも調査すべく、箇条書にした質問事項を各藩に送り返答を求めたものが「諸国風俗問状」である。問状は十二月に分けてあり、その二月に「此月社日につきたる行事候哉」とあるが、八月に社日の項目はない。中山美石が一八一八年に完成した「参河吉田領風俗」では、社日の項目には「さらになし」と答えている。(近藤、五七七、五七八、五九五頁)

(二) 「徳島県北部はふるい」栗の國の北方(きたがた)と

「長」の國の南方(みなみかた)とにわけられている(「福井、三三頁」といわれているが、吉野川流域をキタガタ、南海岸線をミナミガタとするものもある。(金沢1、一三一—四頁)現在、県北、県南の呼称が用いられるが、南方とする阿南市山口では、阿波の南方では地神塔はお城(徳島城)に向けるので北向きであるが、北方ではその方位はまちまちであるとの伝承があるという。(前田氏私信)この伝承は南方と北方の地域文化を背景として地神造立と阿波藩との強い関係を伺わせるとともに、常民の地神にたいする認識や解釈が示されて興味深い。なお徳島県における地神塔その他の地域

差についてわずかではあるが触れたことがある。(梅原5、

五〇頁)

(三) 「天照大神 少彦名命 埴安媛命 倉稻魂命 大己貴命」と五神の神名を刻んだ五角柱の地神塔の分布を相模地域として千葉県を含めてはいないが、千葉県四街道市上野・上野神社の享和三年(一八一〇)塔の写真を示した記述がある。(平野、一九四頁、四〇頁 図一三四)

(四) 『みさと村合併二〇周年記念誌』は、北向き神社についてつぎのように述べている。(美里村1、七頁)

桓武天皇延暦二〇年(八〇一年)、坂上田村麻呂征夷大將軍蝦夷征討のおり、当地身馴川(小山川)の十丈の淵に大蛇が棲み、土民に危害を及ぼしている事を勅使河原の陣中にて聞き、意を決して来村した。当地にては一老人の案内にて日光山に登り、赤城明神へ誓願をなして大蛇を退治したという。この誓願により坂上田村麻呂は北向五社(沼上、北十条、小茂田、阿那志、古郡)と薬師四仏(沼上、北十条、阿那志、古郡)を勧請建立し、大蛇の尻尾を日光山へ埋めその墓の崇りを静めるため、日光安光寺を始めたという。また下見玉金鑽神社、南十条初玉稻荷神社も坂上田村麻呂の大蛇退治に因り創立されたという。当時この台地には大和民族が移住しており、前住の蝦夷民族に襲撃されたために防禦警戒の屯営が北向きになっており、彼等の

尊敬する崇拝神もまた北向きになっていたのであろう。その祠を坂上田村麻呂將軍が参詣祈願したもので、この祠こそ現在の北向神社の実体であり前身であると思う。(一部変更)

また『新編武蔵風土記稿』は、児玉郡之三において、十条村薬師堂についてつぎのように述べている。(蘆田、三一四頁)

鎮守北向明神の本地なり、貞享五年(一六八八)、時の住僧記せし縁起に、坂上田村麻呂將軍、上州赤城明神の本地薬師へ祈誓し、十条淵の大蛇退治の後、郡内当村及沼上・阿那志・小茂田・下児玉の五村に彼明神を崇て、本地薬師を当寺に勧請せしなど云事を載たり、信すべき事に非れば採らず。

なお、沼上の北向神社には「大鳥居七五三繩行事」がある

る。すなわち、毎年一〇月二十九日の秋祭りには新穀豊穰感謝の祈りを捧げるため、大字沼上の田中廓の約四〇戸人びとによって薬の確保から仕上げ奉納までおこなわれているが、長さおよそ一三メートル、重さやく一一〇キログラムである。

(美里村2、二二頁)

(五) 北海道網走地方の紋別市大山町(元・大成)では馬頭観世音と並んで地神宮が立てられている。これについて、「馬頭さんや地神さんを建てる向きは大山の方を向いています、が、大山から神をお呼びするためでしょう」との記述がある。

(長尾、一四―一五頁、一三二頁)

(六) この写真にみられるように、北面する地神塔を正面から撮影する場合、逆光になる。方向の記述がみられない地神塔でも、その正面の写真からおおよその方位を推測できる場合がある。

二 神 号

部落ごとに、天照(皇)大神・大己貴命・少彦名命・埴安姫命・倉稻魂命と刻んだ五角の石柱が立っているが、寛政のころ藩が地神碑建立を奨励したのだという。(永沢、五二頁)

この文章は徳島県の地神さんを記述したもので、ここには美馬郡脇町宮の上の天照皇大神と刻まれた地神さんの写真が示されている。前稿で醜儀に示されている(五三四頁)天照大神、大己貴命、少彦名命、埴安媛命、倉稻魂命の五神号が、徳島県ではその順序に刻まれた例が多いことに触れた。(梅原6、八二頁) 阿南市の地神塔にみられる天照大神

表 2 天照大神の神号

徳島県山川町の地神塚

神 号				基	%
天照太神	照太	照太	神宮神	9	33.3
天照太神	照太	照太	神宮神	5	18.5
天照太神	照太	照太	神宮神	1	3.7
天照太神	照太	照太	神宮神	11	40.7
天照太神	照太	照太	神宮神	1	3.7
合 計				27	

(山川町, 22—75頁)

系の一五一にのぼる神号は三〇種に分類されている。ここでは天照大神と天照大神または天照大神など異体字も別個のものとして取り扱っているが、天照大神宮など皇を含むものが一九基（一二・六％）の地神塚にみられる。（阿南2、五一—六頁）徳島県麻植郡山川町の地神塚にみられる天照大神系の状況はつぎのとおりであり、（表二）天照皇太神系の神号は無視できない。（山川）

また、前述の千葉県海上町の三基の田の神の五神号塔のうち二基は天照大神と刻まれているが、幾世のものは天照皇大神と刻まれている。（図版Ⅳ-3）

北海道の地神塔の神号にも多くの変異がみられ、そこにはなんらかの特定の要因が潜んでいるのではないかと推測したことがある。（梅原2）しかし、天照大

神系の神号のなかの天照皇大神系の神号の出現は神号の一変異以外の根拠をもっているようにも考えられる。それを醺儀に求めるならば、つぎの点を指摘することができよう。同書の示す本朝社之略図は社壇を東北東から俯瞰したように描かれ、北面する石柱の正面には天照皇太神と記されている。（五二—頁）地神塔の造立者がこの図を参考に神号を刻むならば、その正面の神号は天照大神ではなく、天照皇太神となるが、この神号も醺儀に則したものであるということができよう。

また、「天照大神」は「天照皇大神」のほかに、「大土御祖神」と刻まれたものもあることが徳島県の地神さんについて指摘されている。（金沢2、四三頁）そこでは埴安姫命と埴安姫神、倉稻魂命と倉稻魂神の変異も指摘されているが、天照大神と大土御祖神との相違は命と神などの呼称の相違とは異質である。天照大神は特定の個体を示す神号であるが、土御祖神は神の性格を示す名称である。醺儀は天照大神にたいして農業祖神として社稷に祀る性格づけをしてお

表 3 地神塔の神号数

北海道網走郡美幌町

a 1972

地 神 塔	27
1 神 号 型	8
地 神 命	4
大 土 主 神 命	1
大 土 主 之 神 命	1
大 土 大 神	1
大 地 神	1
5 神 号 型	19
(筆頭神号)	
天 照 大 神	3
天 照 皇 大 神	2
大 土 主 神 命	4
大 土 主 之 大 神	4
大 土 主 大 神	3
大 土 主 之 神	3

b 1979

型 式	地神塔	神 号
1 神 号 型	7	7
複 数 神 号 型 (非 5 角柱型)	3	13
5 角柱 = 5 神号型	20	100
計	30	120

※
神号の数

大 己 貴 命	22	倉 稻 魂 命	8
大 土 主 神	19	植 安 姫 命	7
大 宮 姫 命	12	豊 受 彦 命	4
少 名 彦 命	11	地 神	4
太 田 命	11	大 地 主 神	3
保 食 命	9	産 土 神	1
天 照 大 神	8	大 食 神	1

(美幌 1, 1235—6頁)

(美幌 2, 82頁)

※『美幌町史』によれば、天照大神のほかに天照皇大神がある。この程度の神号の差異は、大己貴之命を大貴己命とみなすなど一括してとりあつかっているようである。

り、土御祖神は埴安媛命を修飾する語として用いられている。(五三四頁) 天照大神を別の語句で置き換えるならば農業祖神がふさわしい呼称ともいえよう。

兵庫県三原郡緑町倭文長田では、春秋の社日には部落長が神主が書いたノリトを奏上するという。(直江、二八九頁) 現在ここで奏上される祝詞は醯儀のものと異なるが、醯儀は春秋の社日に用いる祝詞をのせている。(五三三—五三四頁) 春社日に用いるものは天照大神の事跡を述べたのち、その年も種々の災害がなく五穀豊穰であることを祈願して「掛毛畏幾大土御祖神埴安姫神倉稻魂神大己貴神少名彦神乃宇豆乃広前爾恐美惶美毛啓寸」と結んでいる。秋社日も最初の部分にこれとほぼ同様の語句があり、天照大神の名はみられない。さきに触れた福山領答書が「五角なる木を立て」と述べているように、五角柱の石塔を作ることができなかった人びとが各地にいたことが想像される。北海道にも多く

の木柱の地神塔がみられるが（図版Ⅱ-2）、そのほとんどのものはそこに墨書されていたであろう神号を読みとることはできない。^(三)（図版Ⅱ-4）それらの木柱を五角柱の石塔で置き換える時、神職から渡された醺儀の祭文を唯一の権威ある資料として、そこに五神号を求めるならば、大土御祖神を独立した神号として筆頭に、すなわち五角柱の正面に刻むことになったという経緯を想像することができよう。

なお、北海道の地神塔に少名彦命の神号をよくみかけるが。この神号も醺儀の祭文に由来するものかも知れない。（図版Ⅰ-2）

前稿で網走市照和部落の地神塔の正面の神号が大地主命であることに触れた。（梅原3、七五頁）醺儀の第七章は本朝神代大地主神咒にて蝗虫苗の害を退く事と題して大地主神を「おほくにぬしのかみ」と訓じ、稲の害虫である螟蝗を退け豊作とする方法を教えたことを示している。（五一二—五二三頁）北海道開拓期に大蝗害に苦しみ、大国主神を主祭神とする出雲大社にたいする信仰が普及した。（梅原1）このような要因がはたらいて、大土御祖神にかわって大地主命が正面の神号になったということも考えられよう。

しかし、網走市の周辺地域では大土主神の神号を見かけることが多い。（梅原6、七四頁）そして五神号型の地神塔では中央に位置している。^(三)その状況を網走郡美幌町内にみるとつぎのとうりである。（表三）同町では大土主神（おおとこぬしのかみ）、大地主神（おおとこぬしのかみ）、地神（おおとこのかみ）の三神はいずれも大地を主宰する神であると説かれている。（美幌2、八一—八二頁）造立者もこのような解釈に立っていたとするならば大地主神が大土主神におきかえられる可能性は否定できない。その要因がどのようなことであれ、同地方に大土主神系の神号が多いのは祖先効果と呼ぶことができよう。

注

（一）この図の石柱は六角形に描かれている。淡路にも六角柱の

石塔があるが、この場合背面は空白である。（濱岡、四二三頁）五神号を刻むために六角柱を作る積極的な意味は、いま

のところ醺儀の図の忠実な再現以外見出せない。

神奈川県中郡比々多村神戸（現・伊勢原市）木下霊神境内（武田久吉、二二九頁、一四八図）や北海道十勝地方の中川郡幕別町中里の中里神社境内（梅原3、一三二頁）の六角柱Ⅱ五神号型の地神塔の背面には紀年銘などが刻まれている。紀年銘を刻むために六角柱にしたのか、六角柱の空白を埋めるために紀年銘を刻んだのかなど、今後の調査をまたなければならぬ。

阿南市には五基の六神号Ⅱ六角柱の地神さんがある。これらはいずれも埴安姫命のほかに埴安彦命が加わっている。同市椿町平松の一八九〇年（明治廿三寅年旧四月吉日）造立の地神さんの六神号は、天照大神、大己貴命、少彦名命、埴比安古命、埴安媛命、倉稻魂命である。（阿南1、二四頁、二八頁）

（二）北海道日高地方沙流郡平取町幌毛志に五角柱Ⅱ五神号型のシャニチサンがある。これは一九八一年に新しく造立されたもので、それまでは木製の五角柱で、一九七二年当時、墨書

三 土手その他

社日様は、部落を少し離れた高みに祭ってある。周囲に石垣をめぐらし、真中に神名を刻んで五角形の石柱が据えてある。（直江、二八九頁）

醺儀の信奉者で、それが示す方式にしたがって社壇を作り祭祀をおこなった村浦がなかったといいきえることはできな

されていたであろう神号は全然見えなかった。現在の五神号は大食津姫神、大地主神、大歳神、御歳神、若歳神である。（梅原6、二五〇頁）この神号は同町の神職の指示によって決められたものであるという。シャニチサンの名称でわかるように、それは淡路出身者によって創祀されたものであり、最初の神号は現在のもものと異っていたと想像される。同町内の新しい地神塔には幌毛志と同様の神号がみられる。

徳島県山川町西の峰の地神塚は無銘の自然石である。（山川、二二―二三頁）福山市新涯町に「地神」と墨書された自然石の地神塔がある。（石田、六八頁、図八七）これは彫刻の手間を省いたものか、墨書することに意味があるのかなど不詳であるが、このようなものも放置すれば無銘の石になることも想像される。

（三）美幌町では天照大神系の神号はつねに主神である。大地主大神（野崎）（美幌1、一二三六頁）や大土主命（徳山南公民館敷地）（美幌2、八九頁）は天照大神系神号に配祀された形となっている。

い。しかし、現存する地神塔で醺儀の図を忠実に再現したものは管見にはない。醺儀は社壇について細部まで指示しておらず、造立者の裁量に任せられている部分もある。「周囲に石垣をめぐら」された社日様は淡路の緑町倭文長田の社日様の描写である。(図版M-1) 北海道の地神塔を見慣れた目には、石垣を巡らせた塔の記述は奇異に映った。徳島県や淡路の地神塔の記載にも石垣に囲まれたものがあつた記憶もなく、これは造立者の裁量による特異型であろうと感じていた。しかし、醺儀は第一章、神仙春秋社の祭社壇の式並に本朝にて祭る社の図において、「扱壇は高さ三尺五寸、其周回は或は其高さに順ふべし、扱環すに壇を以てすといふて、周廻と壇をして内に人の出入せざる様に致すべし」と述べ、(五一九頁) 本朝社之略図においてもその状況を示し、「社の主は五角の石に各神号を記して主とす、周廻に土手をつきて壇とす、高さと周廻と、又社の主と壇との高さ高さは、其宜しきに随ひいか様にも作るべきなり」と

表四 徳島県阿南市の地神塔にみられる古い紀年銘

(阿南1、四四頁、五八頁)

所 在 地	番 号	造 立 年	紀 年	銘	備 考
1 横見町願能地西	二七	一七六一	寶曆十一年十一月吉日	手洗鉢	
2 津乃峰町中分 古路神社	八一	一七九一	寛政三辛亥年二月十三日		
3 橋町鶴 和光神社	七九	一七九四	寛政六年寅九月□日		
4 横見町高川原	二二	一七九七	寛政九巳年八月社日		
5 富岡町滝ノ下 八幡神社	四四	一七九七	寛政九巳年八月吉日		
6 福井町湊	一二三	一七九七	寛政九年巳年九月十六日		
7 才見町山地 落雷神社	五八	一八〇〇	寛政十二年甲二月吉日		ほこら 手洗い
8 七見町	四九	一八〇〇	寛政十二年二月吉日		
9 見能林町林崎 八幡神社	六四	一八〇〇	寛政十二年		
10 福井町椿地	一三三	一八〇一	享和元稔十二月		

付記している。(五二二頁) 匡弼は聖域にみだりに人びとが立ち入らないように土手を築くことを提唱したが、これは滲透せずまた定着しなかったようである。北海道でも、また福山領内でも五角柱Ⅱ五神号型の木柱の地神塔が立てられていたことはすでに触れたとおりである。^(三) 徳島県内では地神塔が藩の布告により一齊に立てられたというが、現存する地神塔の紀年銘によれば、建立年にはかなりの幅がみられる。阿南市の古い紀年銘は表四に示す。

この場合、創祀年そのものの違いもあるが、木柱など一時的なものを建立し、逐次石塔に替えられたことも想像される。石塔の造塔が遅れるような状況では周牆の造立にまでは手が及ばないことは想像に難くない。本格的な造塔がなされる場合、すでに定着した様式が意匠の決定に影響を与えるものと考えられる。後年に託された築堤はおおくの地方で実現せずに終わったのではなからうか。どのような状況があったのか、想像の域を出ることはないが、土手をめぐらせた地神塔は北海道では目にしていない。しかし、淡路の津名郡東浦町および同町の西に接する北淡町の仁井舟木と常盤などの社日は土堀に囲まれた聖域のなかにまつられている。(濱岡、四二四頁) そのなかでも寛政二年(一七九〇)に建立された東浦町白山の社日は淡路最古のものと思われており、(濱岡、四二四頁、四二五頁) 醺儀の方式をもっとも忠実に実現したものの一つといえよう。またこの地方は主塔を土手で囲む様式が定着した地域であるともいえる。

徳島県においても、勝浦郡上勝町大字正木字坊平に福川名の地神さんがある。祭神は天照大神、大己貴命、倉稻魂命、埴安姫命、少彦名命の五神号で藩の統一指示にしたがったものとされている。形態も他の町村と同じであるとされているが、瑞垣については、「祭神塔を中心に約八〇糎隔てて周囲に高さ一米、巾一米の四米方形石垣が組み立てられ、東方に入口が作ってある」と、現状の描写がおこなわれている(上勝、五一六頁)(図版Ⅶ-2)だけで、その規範となったものや周辺町村との比較はなされていない。徳島県内の石垣や土手に囲まれたその他の報告には接していないが、一般の瑞垣をもふくめて調査をしてみたい。

千葉県海上町の田の神も、大間手、幾世のものには瑞垣が設けられている。

さきに示した北海道美幌町田中南の地神塔（図版Ⅱ-3）のように瑞垣で囲まれた地神塔は北海道でも稀有のものではない。（図版Ⅰ-1）これらはただ聖なる地域を世俗の世界から隔離するのに一般的な観念を借用したものと考えていたが、醺儀の示す社稷壇の具備すべき項目の一つとして瑞垣を築いたものとの考えをも留意して眺める必要がある。

地神塔が路傍の石神として一般に考えられており、このような点をとくにとりあげる必要はないかもしれないが、醺儀は「蓋し社は屋せず、惟壇壝を立て、環すに墻を以てす」と述べ（五一五頁）、また「扱この社の壇には屋根を用ひず、是礼記の郊特牲篇に、天子の大社は必ず霜露風雨を受て、以て天地の気を達すといふに法とる、今此社壇は天子の大社には非ざれども、其霜露風雨を受て以て天地の気を達せしめんと、今屋根を用ひざる也」と説いている。（五二〇頁）北海道空知地方の夕張郡栗山町にはすでに合祀されたものなどを含めて三九社の部落神社^(三)があった。そのうち六社は社日神社、一社は地神社の社号をもっている。その他の神社のうち三社は春秋の、一社は春の社日を例祭にしているように、社日信仰が普及している地域である。（栗山、一二八〇—八六頁）このうちの下角田の社日神社についてつぎのように記載されている。（栗山、一二八一頁）

一八九二年九月二〇日先駆者が天照大神を氏神として奉祠したもので、祠は石造である。ここでは社殿の造営の気運はいく度かあったが火災にあったので「祭神は屋根のある建物を忌み嫌う」と伝えられるようになり、そのままになっている。

このような伝承の発生には醺儀の教義を知るものの関与があったのかも知れない。

札幌市南区定山溪の定山溪農地神社は地神塔を奉斎した神社である。（梅原1）境内に鳥居や参道などが整備され、他の同規模の神社と比較してけっして遜色はみられないが、神殿はない。後志地方の虻田郡ニセコ町有島の称照神社は

拝殿の奥の屋外に地神塔があり、神体となっている。この地神塔は六角柱Ⅱ五神号型で背面には大正拾三年八月建之と刻んである。(梅原3、一三〇頁)

注

(一)すでに触れたように、醺儀の記述には神号や柱形など一貫性を欠く点がある。主石柱をのせる壇についても「扱壇は高さ三尺五寸、其周囲は或は其高さに順ふべし」と述べているが、(五一九頁)図の解説では「又社の主と壇との高さ高さは、其宜しきに随ひいか様にも作るべきなり」と書いている(五二二頁)ことはすでに引用した。

(二)諸國風俗問状の答書では、福山領のほか、その方位には触れていないが、淡路国と阿波国高河原村(現・徳島県名東郡石井町)が地神塔の形状について記載している。淡路国は「石壇を築き、石又は木を五角に作り、天照大神・少彦名命・埴安媛命・大己貴神・倉稻魂命の五神を祀し、……」(平山、七七九頁)と、また高河原村は「社日は地神祭とて、天照大神・倉稻魂命・大己貴命・埴安媛命・少彦名命、如斯神名神石五角に切みかき切付、村内に勧請仕、……」(平山、

八一六頁)と述べている。福山の記述をも含めて、この塔の形態が五角柱であること、そこに記された五神号がほぼ同一であることからその均質性が知られるが、塔の材質についてのみ異った記述がなされている。すなわち、阿波は石、淡路は石又は木、福山は木で作られている。これらの記述に付帯する條件を一切無視して一般化して考えるならば、これらの状況は石塔としての完成度を示すものとも考えることができよう。その達成の状況は藩の奨励の時期やその熱意、あるいは民衆の経済力などが影響を与えていると思われるが、このことから、現在ほとんどの地神塔が石塔である徳島県下でも、まず木柱が建立され、漸次石塔に置き換えられたという状況が想定できる。

(三)角田神社ほか三社の法人登録神社以外の神社をこのように部落神社と呼んでいる。(栗山、一二七四—一二八〇頁)

考 察

特殊な形の社日としては、小さい自然石を五つ並べたものが一例ある。(濱岡、四二三頁)
ほとんどの形態が一定しているといわれている淡路の社日にも、このようなものがある。^(二)一定の規格のものが量産さ

れ分配される組織が整っている現在とはことなり、すべての塔は同じ教範に則ったとしてもそれぞれ個別につくられたはずである。造塔者は醺儀から守るべき点を読みとり、その再現を目論んでも、造塔者の裁量に委ねられる部分がある^(三)ことは前述の通りである。醺儀は社稷として、壇をつくり、主となる石を立てること、それを五角とすること、それに五神号を記すること、正面を北方に向けること、屋根をつくらないこと、土手を廻らすことなどを求めている。あるものは醺儀を直接読むことでその内容を汲みとるであろうし、あるものはその一部を書き写したもの、たとえば図とか祭文とか抜き書きなどに拠るものもあろう。またあるものは近隣の人びとからの口伝えによって造塔の基準を定めることもあろう。阿波藩の地神祭の奨励がどのくらい持続したのかは不明であるが、^(三)地神祭祀の布告の内容が現在不明であるということは、地神祭祀の奨励も具体的な造塔形式の順守などの具体的な点に直接関与する部分は少く、造塔の意匠は常民の次元で決定されるようになったことが想像される。その次元では、つまり民間信仰としての地神信仰では、個々の規範は村民としての立場で自由に解釈され、淘汰され、特殊化され、また新しい項目が付加される^(四)という現象がおり得る。

五神号型の地神塔の神号の変異は興味のある問題である。香川県香川郡上多肥彦作池堤（現・高松市）のセンダンの木の下^(五)の地神さんの神号は大年神、保食神、御年神、若年神、龍田神であり、（加藤、一二六頁）北海道上川地方の富良野市学田上五区地神の五神号は、天照皇太神、大穴年遅神、猿田彦神、少名毘古那神、倉稻魂神（梅原5、一三二頁）と醺儀の示すものとは異っている。このような変化はついに五角石柱におよぶ。五角の石柱という形態は石塔のなかで他の類と区別する最も際立った特徴となっている^(五)。経済的、技術的な事情で五角柱の石塔を造立することが困難な場合、それを木柱にしたり、自然石の一面に五神号を並列したり、「地鎮五代」と刻んで（梅原4）その効験にあやかうとしたことが推測される。北海道後志地方余市郡赤井川村旭丘の地神塔は円筒形の自然石の全側面に、つまり五方向

に天照大神、少彦名命、埴安姫命、大己貴命、稻倉魂命の五神号を刻みほぼ北面して立てられている。(図版Ⅱ-1)
五角柱の石塔を何らかの理由で造立できなかった人びとが、より原型Ⅱ理想型に接近しようとした努力がここにあらわれているのである。理念型は社会の状況に適応して実現され、また社会の変化にしたがって理念そのものも変化してゆくのであろう。

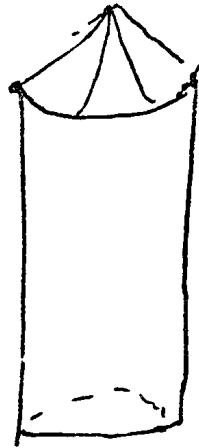


図2 上部のみ五角に削られた
淡路の社日

注

(一) 兵庫県津名郡津名町長沢の東山寺の近くの東山寺と呼ばれる山中の集落にある。中央の松の木に掛軸をかけるという。

(濱岡きみ子氏私信)(図版Ⅴ-2)

(二) 北海道空知地方の雨竜郡幌加内町のちぢんさんと呼ばれる地神宮について、「多くは自然石の表に「地神宮」と刻み、思い思いの趣向をこらした台石の上に安置して奉ったものである」とされている。(幌加内、六五九頁)

(三) 明治維新後も「社日休奨励之事」と題するお触れが民政部名で発せられているという。(金沢2、四四頁)

(四) 北海道上川地方空知郡上富良野町旭町中之沢の五角柱Ⅱ五神号型の地神塔の神号は、天照皇大神、瓊瓊杵命、鵜屋葺不

合命、火火出見命、忍穂耳命である。(上富良野、四三〇頁)
この系統の神号も少数ではあるが道内各地にみられ無視しない。前田克己氏はこの種の神号群にたいして地祇系と名づけ、醜儀の五神号を農神系として分類されている。(前田、一四—二二頁)

寛政三年(一七八二)の藩の決定によりその塚の形態や祭神が統一されたとする徳島県上勝町内の地神塚の祭神は天照大神、倉稻魂命、埴安媛命、少彦名命、大己貴命の五神であるが、(上勝、三頁) 同町の田野々中村部落にある海津の建立年不明の地神さんの五角柱の碑面には、それぞれ天照大神、瓊々杵尊、葺不合尊、炎出見尊、忍穂耳尊と石深く彫り込まれているという。(上勝、三〇頁)

このような神号が、醜儀の示した神号に入れ替ったものか、はじめから独立して存在していたものか、今後の検討を要する。

地神さんについて「土地の神・農神と云ってもご神体がはっきりしていなかったため、阿波藩では寛政三年、祭神をはじめ祭の様式をきめ、その日は農作業を休み、祭神に奉仕す

ると共にもっぱら休養する様各村々に命じた」と云われるように（上勝、三頁）地の神にたいする信仰の形態が、醺儀等の影響で新しく教義や形態が整えられ、多くの人びとがそれを採用したということであり、地神信仰のなかには、醺儀以外の形態もありうる。上勝町葛又の葛又明見神社境内に地神さんがあるが、これは他の四つの祠とならんで南向である。地神祠は高さ一米六〇糎、間口六七糎、奥行き七五糎で、近年トタン葺きの屋根となった。これは古い江戸時代の昔から葛又部落民のみならず一般の者の尊崇を集めているという。

後 記

本稿は、あくまでも大江匡弼の『春秋社日醺儀』に従えよという前提にもとづくものであるが、他の著作の存在を否定するものではない。また、神と神など書き分けた部分があるが、本稿の全部分におよぶものではない。

いつも多くの方がたの御援助をいただいているが、本稿を草するにあたり、とくに左の方がたから貴重な資料や情報の提供をうけたことを記して深甚なる謝意を表わしたい。

阿南市教委、河内美代子氏、同市史編纂所、新居文子氏、徳島県上勝町教委、谷崎勝祥氏、兵庫県一宮町、濱岡きみ子氏、同緑町教委、大瀬 久氏、同町倭文庄田、八幡神社宮司、棚田康暉氏、横浜市教委、岸上興一郎氏、千葉県海上町史編纂室、馬淵一弘氏、教委、嶋田正夫氏、同町埼玉県大井町、大友則弘氏、同県児玉町、田島三郎氏、同県美里町教委、今井 仁氏、札幌市北区総務課、高谷和明氏、北海道余市郡余市町、前田克己氏

（上勝、三〇頁）

阿波の吉野川の北方地域から東讃岐地方にかけて多く分布する地神さんのなかで、古いものは元禄ごろからあるという。（市原ら、一八七頁）

（五）五角柱は僧侶の墓標として見うけられる五面石幢であるとの指摘がある。（伊東、二二頁、三二頁）

（六）淡路にも円筒型で上部を五角錐にしたものもある。（濱岡きみ子氏私信）（図2）

付 社日祭祝詞

春季社日祭祝詞

掛卷母畏伎天照大御神本乃御名乎婆撞賢木嚴乃魂天疎向津媛尊亦御名乎大日靈貴尊止奉称曰大御前尔恐美恐美母白左久遠津神代尔神祖二柱命乃生坐賜比志御子保食乃神亦御名乎婆大食津媛命止申曰稻種乎始女麦大豆小豆粟稗乎手保志賜反留乎大御神看行玉比弓其乎姿求取良志賜比弓宜久此礼乃物共波頭見蒼生乃喰比弓可活物種子奈里止告曰粃乎婆田成物止志麦大豆粟尔稗小豆乎姿畑津物止宜別賜比伎故天乃田長乎置伎春波種蒔夏波田每尔執良志女賜比弓其秋乃垂穗八握尔志那毘最豊介久饒々志久有里伎故是乎以弓上津代与里永年乃今日尔至留迄天ノ下大御田族等弥次々尔常乃産業止伊曾志美作里弓樂志伎事乎得多留然為賀尔大御神達守幸波延給比弓霖雨旱魃乃碍里蝗乃災暴風乃荒毘不令有安田乃稻乃八束穗乃伊加志穗尔実入額伏世給反其萬乃民乃竈乃賑波布波大神等乃恩頼尔曾有介留故是乎以弓寿詞乃称辞乎奉申奉良久止白須

秋季社日祭祝詞

掛卷久母恐伎地神五社止齋伎祀留大神等乃大前尔恐美恐美母白左久今日大前乎拜奉留状乎平介久安介久聞食志弓持別久留各母各母乃家尔母身尔母諸々乃禍事有良世受手飼乃牛馬尔至留迄安久穩尔弥益尔弥広尔守里給反幸波延給反止恐美恐美母白須

文献

蘆田伊人・編、一九三三、『大日本地誌大系 新編武蔵風土記稿
十二』、雄山閣。
阿南市婦人ボランティア活動文化財愛護コース（編）、『地神さん

の調査』同市教委。

- 1 一九八〇、その一。
 - 2 一九八一、その二。
- 石田一成、一九八四「備後の地神塔」、畠中弘、他（編）、『日

本の石仏』三、国書刊行会。

市原輝士、一九八〇（二刷）『香川県』、金沢 治・他『四国の民間信仰』明玄書房。

市原輝士、山本 大、一九七四（四刷）『香川県の歴史』山川出版社。

伊東重信、一九八三、『横浜市域の地神塔』、『日本の石仏』二七。

梅原達治

1 一九七五、『北海道の出雪神社』『札大教養短大紀要』七。

2 一九八一、『地神塔の神号』、『北海道の文化』四四。

3 一九八二、『北海道の地神塔——その覚え書き』、『札大教養短大紀要』二〇—A。

4 一九八二、『北海道蘭越町の地神塔』、『札大教養紀要』二一。

5 一九八四、『瀬棚地方の地神さん』、『北海道の文化』五一。

6 一九八四、『北海道の地神塔の儀軌』、『札大教養紀要』二五。

宇山清人（編）、一九七六『地神塚と光明真言百萬遍碑』山川町連合婦人会（徳島県麻植郡山川町）。

大護八郎、一九五七（二刷）、『石神信仰』木耳社。

加藤増夫、一九七五、『地神さんの話』、『民間伝承』六、国書刊行会。

金沢 治

1 一九七四（再版）、『日本の民俗 徳島』、第一法規。

2 一九八〇（三刷）、『徳島県』、同、他、『四国の民間信仰』明玄書房。

上勝町教委、同町文化財保護審議委。一九八三、『地神塚、百萬遍碑、祠についての調査』、同町教委（徳島県勝浦郡）。

栗山町史編さん委員会（編）、一九七一、『栗山町史』同町（北海道夕張郡）。

近藤恒次（編）、一九八〇、『三河文献集成、近世編』下、国書刊行会。

嶋田 孝、一九七八、『田の神祭りの考察』、『海上町史研』八、同町史編纂室（千葉県海上郡）。

島村知章、一九七四、『岡山県土俗及奇習』、『日本民俗誌大系』三、角川書店。

滝本誠一（編）、一九六八、『日本経済大典』一七、明治文献。

武田 明、一九七二、『日本の民俗 徳島』第一法規。

武田久吉、一九四三、『農村の年中行事』龍星閣。

直江広治、一九七四（二版）、『家の神と部落の神』、和歌森太郎（編）、『淡路島の民俗』、吉川弘文館。

長尾 守、一九八〇、『紋別石碑散歩』、『郷土誌』六、紋別郷土史研究会（北海道紋別市）。

永沢正好、一九七六、『徳島県の歳時習俗』、同、他『四国の歳時習俗』明玄書房。

新居文子、一九八四、『阿南市の婦人ボランティア活動』、『徳島の文化』三。

服部重蔵、一九八一、「東総の作神祭」、『日本の石仏』一八。
濱岡きみ子、一九八四、『日本の神々 神社と聖地』三、白水社。
美幌町（北海道網走郡）

- 1 同町史編さん委（編）、一九七二、『美幌町史』、同町。
- 2 同町総務部企画課、一九七九、『美幌の石碑集』同町役場。
平野榮次、一九八四（再版）、「民間信仰と塔」、庚申懇話会（石川博司、他）『石仏調査ハンドブック』雄山閣。
平山敏治郎・編、校注、一九六九、「諸国風俗問状答書」、竹内利美、他・編『日本庶民生活史料集成』九、三一書房。
福井好行、一九七三、『徳島県の歴史』、山川出版。
藤丸 昭、一九八〇、「農耕儀礼」、金沢 治、他『四国の民間信

仰』、明玄書房。

幌加内町史編さん委員会（編）、一九七一、『幌加内町史』、同町（北海道雨竜郡）。

- 前田克己、一九七八、『北の地神さん』、『えぞまつ豆本』九。
美里村（現・美里町、埼玉県児玉郡）
- 1 同村総務課・編、一九七四、『みさと』、同村。
 - 2 同村教育委員会、一七八二、『美里の文化財』、同村教委。
渡辺月石（編）、新見貫次（校注）、一九七一、『堅磐草』、名著出版。
横浜市文化財研究調査会、編、一九六九、『横浜市文化財調査報告書』六、同市教委。

正 誤 表 「北海道の地神塔の儀軌」（札幌大教養紀要、二五）

頁	行	誤	正
八一	二	飢えたまふ時、生める子	飢えたまふ時、生める子
八二	一一	刻んだものもあると示唆	刻んだものもあると」示唆
八七	写真10	「開成町、152頁）	（開成町、152頁）
八九	下五	『日本の石塔』	『日本の石仏』

Supplementary Notes on Model of the Stone Markers of Earth Divines of Hokkaido

UMEHARA Tatuji

Abstract. First, in the previous paper, the author deals with the several models of the memorial stones honoring the Earth Divine in Japan and also treats of Ōe Kyokuhitsu's '*Shanichi-shōgi*', textbook which, for rich crop, requires the installation of the pentagonal pillar with the appellations of five-partites inscribed on their lateral facets separately.

Next, the author deals with the pentagonal markers *status quo* in comparison with the teaching of '*Shanichi-shōgi*'. Considerations about similarities and differentiations of the markers, especially on directions or appellations, are made from the historical and social standpoint of view.

Errata : Model of the Markers of Earth Divines of Hokkaido
(J. Fac. Gen. Educ., Sapporo Univ. 25)

p.	l.	wrong	right
92	21	si	is
91	1	followingis	following is
	2	kyokhitsu	Kyokuhitsu
	11	<i>Kaki.</i>	<i>Kaki-</i>
	22	perfonm	perform
	45	ussage	usage